

投稿論文

# ドイツにおける幼児教育制度改革と森の 幼稚園の取り組みの教育的特質 —— カリキュラムの分析を中心にして ——

後藤 みな\*

The Reform of the German Early Childhood Care and Education System  
and the Characteristics of the Waldkindergarten Practices:  
Focusing on Curriculum Analysis

Mina GOTO

本稿では、ドイツにおける幼児教育制度改革の動向を踏まえた上で、言語能力、幼小接続、知的教育に関する観点から森の幼稚園のカリキュラムを分析し、次の特質を明らかにした。言語能力の促進に関する観点からは、言語能力が子どもの心身の発達に関わる重要課題であるとの認識を基礎として、話すことのみならず、聞くことへの能力の促進も目指されていた。幼小接続に関する観点からは、集中力、運動能力、認識や理解、学習意欲に関わる能力をも含む多面的な能力の獲得が目標とされると同時に、就学後の学習で実感を伴った理解ができるように量や大きさ等の感覚を助長することがねらわれていた。知的教育に関する観点からは、身近な自然について知るという知識面の獲得と、道具の使い方について知るといった技能面の獲得を考慮してカリキュラムが構成されていた。

## 1. 序

昨今ドイツでは、地方分権的な教育に対して国家的な教育の枠組みを策定し、カリキュラムの標準化を図る教育改革が行われているが<sup>①</sup>、その中で真っ先に問題視されたのは幼児教育である<sup>②</sup>。すなわち幼児教育制度改革を通して、言語能力の改善、基礎学校との接続強化、知的教育への重点化が図られるようになったのである<sup>③</sup>。

こうした改革の影響を受けるのは、幼稚園 (Kindergarten)、保育所 (Krippe)、

---

\*修紅短期大学

KITA (Kindertagesstätte) のみならず、固有の教育理念を持つ幼児教育施設や幼児教育実践も含まれる。ドイツでは、改革教育学の流れを汲んで誕生した、状況的アプローチ (Situationsansatz)、モンテッソーリ教育学 (Montessori-Pädagogik)、ヴァルドルフ教育学 (Waldorf-Pädagogik)、レッジョ教育学 (Reggio-Pädagogik)、自然・森の幼稚園 (Natur- und Waldkindergarten) などの教育の特質が議論されてきており、改革が進展する現在ではそれらの比較検討が一層行われている<sup>6)</sup>。以上の幼児教育施設や幼児教育実践にとって、その特質が何であるかを示すことは、それぞれの成立基盤にも関わる重要な問題である。

ところで、森などの自然の中で教育を行っている森の幼稚園は1990年以降拡大し<sup>6)</sup>、関連する書物も多数発行されており、ドイツの幼児教育領域に確かな地歩を占めつつある。先行研究では、森の幼稚園における教育の特質が様々な視点から論じられている。具体的には、自然教育<sup>6)</sup>、発見学習<sup>7)</sup>、環境教育<sup>8)</sup>、ホリスティック教育<sup>9)</sup>に焦点化した研究が見られる。こうした研究によって、森の幼稚園においてその実践の基盤とされてきたものが徐々に明らかにされてきている。しかし先行研究では、冒頭に述べたような改革の影響を分析しておらず、森の幼稚園の教育の変容やその特徴が十分に描かれているとは言い難い状況がうかがえる。これらを明らかにすることは、教育改革が森の幼稚園に及ぼした影響を推察し得るのみならず、今日における森の幼稚園の教育の方向性を示し得るという点にも意義があるといえる。また、改革を受け入れつつも、なおも独自性を残そうとする意図を探ることにより森の幼稚園の取り組みの特質が明確になるため、この点も吟味する必要があると思われる。

そこで本稿は、幼児教育制度改革の具現化として、言語能力の改善、基礎学校との接続強化、知的教育への重点化が進展する中で、森の幼稚園における教育の変容の一端を解明した上で、森の幼稚園の取り組みの教育的特質を考察することを目的とする。具体的な手順は次の通りである。まずドイツ再統一後の幼児教育制度を概観し、森の幼稚園やその他の施設にとって活動の基盤となる幼児教育の根拠法令を確認する。次に改革への関心が高まったきっかけである2つの国際学力調査の結果を整理し、国をあげて策定された教育の枠組みや州の幼児教育要領について述べる。そして分析対象とした森の幼稚園におけるカリキュラムと州の幼児教育要領とを比較しつつ、言語能力、幼小接続、知的教育に関する観点から分析する。それらの観点から森の幼稚園のカリキュラムを分析することで、教

育改革の影響を多面的に検討することができる。また、特質を考察する際は、カリキュラムのみならず、改訂の際に保護者等関係者と森の幼稚園の間で議論された資料も用いることとする。

本稿では、国際教育到達度評価学会（The International Association for the Evaluation of Educational Achievement: IEA）の定義に倣い<sup>(9)</sup>、「意図したカリキュラム」、「実施したカリキュラム」、「達成したカリキュラム」の3つのレベルを想定し、その総体としてカリキュラムを捉えることとするが、ここでは、州や森の幼稚園の担い手が定めた教育内容、すなわち計画レベルでのカリキュラムを用いるため、ほとんどが「意図したカリキュラム」の意味となることを予め断っておく。なお、ドイツでは伝統的に、州が文化や教育に関する権限である「文化高権（Kulturhoheit）」を持っているため、幼児教育の実態は州によって異なる。本稿では、幼児教育制度改革に先進的に取り組んでいるノルトライン・ヴェストファーレン州（以下、NW州）を取り上げることとする。

## 2. ドイツの幼児教育制度

戦後ドイツは、ドイツ連邦共和国（以下、旧西ドイツ）とドイツ民主共和国（以下、旧東ドイツ）とに分かれ、幼児教育制度においても、それぞれ異なる道を歩んできた。旧西ドイツでは、子どもの養育は基本的に「両親の自然の権利」があり、幼児教育施設は家庭を補完する教育と位置づけられていた<sup>(10)</sup>。旧西ドイツにおいては、1980年代の幼児教育施設の普及率は乏しく、3歳未満の子どもの僅か2%が保育所等に預けられていた程度である<sup>(11)</sup>。その一方で、旧東ドイツでは男女同権の実現を目指し、女性の家事労働からの自由が求められていた背景から乳幼児のための施設が充実していた<sup>(12)</sup>。ただ保育所や幼稚園が十分に普及していても、実際には子どもの数に対して職員が少なく仕事の負担も大きかったため、子どもを世話する時間が少なくなるなどの質の上での問題も少なくなかった<sup>(13)</sup>。

こうした東西の幼児教育制度の違いは、統一後、旧西ドイツへの同化というかたちで徐々に解消されていく<sup>(14)</sup>。子どものための施設には、3歳までの保育所、3歳から就学前までの幼稚園、就学段階の学童保育、それらが一体化されたKITAなど存在し、こうした施設に関する条項は、社会法典第8編における「児童・青少年援助法（Kinder- und Jugendhilfegesetz）（以下、KJHG）」（1990年6月26日公布、1991年1月1日施行）に内包されている。KJHGにおいては、就学前の子

どものための施設は、社会福祉施設として位置づけられている<sup>(16)</sup>。しかし今日においては、社会福祉施設でありながらも教育施設の要素も持つようになってきている。これには、次章で述べる教育改革が関係しているといえる。

### 3. TIMSS ショック・PISA ショックと教育改革の展開

#### 3.1 学力低迷の波状ショック

1995年に実施されたIEAによる第三回「国際数学・理科教育動向調査 (Trends in International Mathematics and Science Study: TIMSS)」を受けたドイツの生徒の成績は、中学2年生の数学509点 (23位/41ヶ国・地域)、理科531点 (18/41)であった。坂野はこの結果について、ドイツの生徒が試験様式に不慣れなことを理由に挙げて調査結果を必ずしも信用していなかった、と一部の関係者の話を報告している<sup>(17)</sup>。ドイツでは、ドリル学習などに頼った詰め込み競争型教育の選択肢は採らないとの自負がみられ、TIMSS1995の結果を単なるランキング・ショックとして受け止めた<sup>(18)</sup>。

また、もう一つの国際学力調査である、経済協力開発機構 (OECD) による「国際的な生徒の学習到達度調査 (Programme for International Student Assessment: PISA)」においては、15歳の生徒を対象として、読解力・数学的リテラシー・科学的リテラシーなどが調査されている。PISA2000におけるドイツの結果は、読解力484点 (21位/32ヶ国)、数学的リテラシー490点 (20/32)、科学的リテラシー487点 (20/32)であった。高次の学力とされる問題解決力を測るPISAの問題に対しても好成績を残せなかったことへのショックによって、教育改革を求める土壤が形成されていった。

#### 3.2 幼児教育制度改革の展開

以上みてきたように、国際学力調査の結果から受けた波状のショックによって、教育改革が進められることとなった<sup>(19)</sup>。これまで連邦レベルで教育改革の議論が行われたことはあまりなかったが、今回は中央集権的ともいえる大掛りな教育改革が進められることとなった。PISA2000の結果が公表された直後、各州文部大臣会議 (Kultusministerkonferenz: KMK) が教育改革の核として7つの措置を発表し、優先的に取り組むことで合意している。それらは極めて広範な領域に及んでいるが、幼児教育に関するものは、(1) 就学前段階からの言語能力の改善に関

する措置、(2) 就学前段階と基礎学校との接続の改善に関する措置の2つが挙げられている<sup>(20)</sup>。

また、連邦文部大臣や各界の代表者によって改革が議論された教育フォーラムにおいては、次のことが提言された。すなわち「早期教育の充実。具体的には、就学前教育内容を定義し、実施すること、就学適性テストの導入、…幼稚園や基礎学校における科学教育、技能教育、外国語、音楽・創造教育の充実」である<sup>(21)</sup>。なお本提言の特徴は「知的教育への重点化」と表現されており<sup>(22)</sup>、本稿でもこれを用いることとする。

以上の、言語能力の改善、幼小接続の強化、知的教育への重点化に留意して、各州は幼児教育要領を作成、公表することとなった。

### 3.3 NW州の幼児教育要領の変遷と基本構造

本稿で取り上げるNW州は、2003年にはじめての幼児教育要領である「教育協定 (Bildungsvereinbarung)」を公表した。この協定では、3歳から就学前までの子どものための施設における教育課程を強化し、さらに発展させることが目的とされていた<sup>(23)</sup>。2005年にドイツ社会民主党 (Sozialdemokratische Partei Deutschlands: SPD) / 緑の党からドイツキリスト教民主同盟 (Christlich-Demokratische Union Deutschlands: CDU) / 自由民主党 (Freie Demokratische Partei: FDP) の連立政権へと移行したことをきっかけにして、幼児教育要領を改訂している。2010年には「NWの初等領域にある子ども全日施設と学校における0から10歳の子どもたちのための教育支援の原則—教育を通して始めからよりチャンスを(案)—」<sup>(24)</sup>という、幼小接続の色が顕著に表れたタイトル、内容となった。2016年には、再度ドイツ社会民主党と緑の党による連立政権に移行し、2010年版の幼児教育要領をほぼ踏襲するかたちで、「NWの初等領域にある子ども全日施設と学校における0から10歳の子どもたちのための教育の原則」<sup>(25)</sup>を公表することとなった。このようにしてNW州の幼児教育要領は変遷してきた。

幼児教育要領の構成に目を向けると、「教育について」、「教育に責任を持つ」、「教育を具体化する」となっている。「教育を具体化する」の中には、知的教育への重点化を受け、10の教育領域が書かれている。それらは、(1)運動、(2)身体、健康、栄養、(3)言葉とコミュニケーション、(4)社会的、文化(多文化)的教育、(5)音楽・美的教育、(6)宗教と倫理、(7)数学教育、(8)自然科学・技能教育、(9)

エコロジー教育、(10)メディア、である。なお、(3)は、言語能力の改善を図るための教育領域となっている。2010年版以降、先に述べた3つの改革の方針が考慮されるかたちで幼児教育要領が作成されたといえる。NW州における各幼児教育施設では、これを枠組みとして教育を行うこととなった。詳細は後述するが、森の幼稚園も、こうした幼児教育要領の影響を受け教育を行っていた。これについて述べる前に、森の幼稚園の概要や分析対象とした園の選定理由、カリキュラムの分析の枠組みを示しておこう。

## 4. 森の幼稚園のカリキュラム分析の枠組み

### 4.1 ドイツ森の幼稚園の概要

森の幼稚園は、1950年代半ばにデンマークにおいて誕生したとされている<sup>(26)</sup>。ドイツでは、保育者である Petra Jäger と Kerstin Jebsen が *spielen und lernen* 誌に掲載されていたデンマークの森の幼稚園に関する論文を読み、その考え方に基づいて、1993年にフレンスブルク市に森の幼稚園を創設した。この森の幼稚園の創設に伴い、「この理念への興味・関心が湧き立ち、瞬く間に連邦全土に様々な形態の森・自然の幼稚園が生じた」<sup>(27)</sup>。

Huppertz は、森の幼稚園の規模、日課、教育の重点、施設・避難所の有無などに対する質問紙調査を実施し、平均的な森の幼稚園のデータを導いている。それによると1園あたりの子どもの人数は最大20人で、平均すると16.7人であり、また、1園あたりの保育者の数は2から4人で、一人あたり約6人の子どもを世話する<sup>(28)</sup>。日課には、朝の会、朝ごはん、昼食、グループ活動、自由遊び、目的ある課題などがある<sup>(29)</sup>。教育の重点には、社会性を養う教育 (Sozialerziehung)<sup>(30)</sup>、自然との出会い、認知すること、運動能力の促進 (Motorik, motorische Förderung)<sup>(31)</sup>、環境や事象との出会いなどがある<sup>(32)</sup>。施設・避難所については、トレーラーハウス (Bauwagen)、小屋 (Hütte) を持つ森の幼稚園が多いとされている<sup>(33)</sup>。

### 4.2 分析対象園の概要と選定理由

ここでは、分析対象園としたオイレンネスト森の幼稚園 (Naturkindergarten Eulennest) の概要について述べていくこととする。当園は、2002年に「自然グループオイレンネスト」として誕生し、その後「オイレンネスト森の幼稚園」へ

改名している。当園の教育の使命は、子どもの身体的、心的、精神的な成長と成熟のため、また「うまくいく人生」をおくるため、子どもたちに様々な「自然空間」を体験させることによって、理想的な土台を提供することにある<sup>(34)</sup>。また、当園が学習の最適な条件として考えているものは、疑問、好奇心、関心である。特に、疑問を持たせるためには、子どもたちに体験させたり、発見させたり、変化を認知させたり、おいを嗅がせたり、観察させたりするための時間と空間が必要であるという<sup>(35)</sup>。さらに当園では、「おもちゃなし」の森の幼稚園（“spielzeugfreie” Waldkindergarten）として活動している。

オイレンネスト森の幼稚園を取り上げる理由は、第一に、平均的な森の幼稚園であると考えられ、第二に、教育の質が担保されているとみなすことができ、第三に、昨今の教育改革前後のカリキュラムを有しているためである。この3点について具体的に見ていくこととする。まず、オイレンネスト森の幼稚園の諸相を先に挙げた Huppertz による調査の結果と照らし合わせたとき、突出した項目がなかったことから平均的な森の幼稚園であると考えられた。また当園は、少なくとも2004年以来、NW 州森の幼稚園協会（Landesverband der Wald- und Naturkindergärten NRW e.V.）から質保証の認定を受けているため、教育の質が担保されている森の幼稚園としてみなすことができた。さらに当園には、教育改革前後のどちらのカリキュラムもあり、それらは後に詳述するように、比較、分析に耐え得る資料であると考えられた。以上の理由から、当園を事例として取り上げることとした。

#### 4.3 分析の対象

ここでは、分析対象のカリキュラムについて述べていくこととするが、はじめに分析対象となり得る4つのカリキュラムがそれぞれいつ編成され、どのような差異があるのか、簡単に言及しておこう。オイレンネスト森の幼稚園の最初のカリキュラムは2004年のもので、2008年、2014年、2016年には改訂版が公表されている。これら4つのカリキュラムのうち教育改革前に編成されたのは、2004年版であるといえる。同時期に、NW 州の幼児教育要領が発表されているため、2004年版は教育改革の影響を受けている可能性があるものと考えられたが、2004年版には教育改革関連の内容が書かれていないのである。つまり2004年版の「法的根拠」欄には、「NW 子どものための施設法」のほか、「NW 森の幼稚園協会」に所

属していることが記載されているものの、NW 州の幼児教育要領等についての言及は見られない<sup>(36)</sup>。その一方で、2008年版以降の「法的根拠」欄には、「子ども教育法」、「NW 森の幼稚園協会」のみならず、「NW 州幼児教育要領が決定的に影響を及ぼしている」こともまた、明記されているのである<sup>(37)</sup>。したがって、2004年版のものは教育改革の前のものであり、2008年版以降は教育改革の影響を受けて編成されたものであるといえる。

また、表1にも示しているように、教育改革の流れを受けて編成された2008年版と2014年版では、「教育領域」の構成が大きく異なっている。2008年版においては、教育領域のほとんどが「自然」であったが、2014年版では、NW 州の幼児教育要領にて設定されている教育領域をほぼ導入するかたちで構成されるようになったのである。また、2014年版以降は、「私たちのプロフィール」という新たな項目が設けられていることも見受けられる。その内実を見れば、2004年版、2008年版の教育領域「自然」の内容の一部が、このプロフィールへ移行されていることが確認される。なお、2014年版と2016年版とを比較すると、前者よりも後者の方が、保護者に向けたメッセージや森の幼稚園関連のQ&Aなどが充実している一方で、「法的根拠」、「教育領域」、「私たちのプロフィール」に大きな変化は見られない。そこで本稿では4つのカリキュラムを俯瞰しつつも、改革前に編成された2004年版、改革の流れを受けて改訂された2008年版、カリキュラムの構成に変化が見られた2014年版を中心的に分析することとした。

#### 4.4 分析の観点

先にも述べたように、KMK は教育改革の核として、幼児教育に関するものを2つ挙げていた。一つは言語能力に関するもので、もう一つは基礎学校との接続に関するものであった。また連邦文部大臣と各界の代表者により提案されたのは、知的教育への重点化であった。これらは連邦をあげて優先して取り組むべきこととして掲げられており、森の幼稚園においても等閑視し得ないものである。そこで第一に、言語能力の促進に関する観点、第二に、基礎学校との接続に関する観点、第三に、知的教育に関する観点を分析の観点として設定することとした。

第一と第二、および第三の観点は議論されている組織こそ違いますが、どれもドイツの幼児教育制度改革の具現化を図って示された国家レベルの方針であり、まずもって取り組まれるべき重要課題である点で共通している。これら分析の観点か



ら森の幼稚園のカリキュラムを分析することで、改革の影響を多面的に検討することができると考えられる。次章では、これらの観点からの分析結果と、森の幼稚園の取り組みの教育的特質を述べていく。

## 5. 森の幼稚園の取り組みの教育的特質

### 5.1 話すことと聞くこととしての言語能力の促進

言語能力の促進の観点から分析結果を述べることにする。2004年版には、教育領域「自然」の中に「言語発達への刺激」という項目があり、そこには、自然物を用いて遊び道具を作った時に、その用途や機能を説明しなければならないことが書かれている<sup>(38)</sup>。2008年版には、さらに、「例えば一年間を通して樹木の変化について観察し、体験し、言語的に理解する」<sup>(39)</sup>との記載が追加された。2014年版以降になると、「言葉は、思考を展開するのみならず、人格の発展にも影響を及ぼす」ため重要であることが記され、言語能力を促進することの意義が明確にされるようになる<sup>(40)</sup>。2016年版では、「言葉は子どもたちに学校に乗り込むこと(Einstieg)を容易にし、媒介する。言葉は最も重要な道具であるといってよい」とされ、言語能力の促進が就学準備との関係でますます重要視されるようになる<sup>(41)</sup>。

森の幼稚園では、子ども自身が言葉を発することの他に、保育者や大人の話に注意深く聞くこともねらうようになった<sup>(42)</sup>。一方で、州の教育要領には、「話し合いの中で本心を打ち明けること、自分の感情、意見、考え、体験を表現すること」といった、子どもが言葉を発することが明記されているが<sup>(43)</sup>、保育者や大人の話に注意深く聞くことについては明記されていない。したがって、この点は森の幼稚園の特質であるといえよう。この点は従前に全くなかったとは言えないが、改革を受けてより自覚的に言語能力の発達に注力したものと思われる。

森の幼稚園が、保育者や大人の話に注意深く聞くことを重視する意図は2通りあると考えられる。一つは、保育者や大人の話に聞くことが森の幼稚園なりの「確かで、良い就学準備」となるためである。幼児教育制度改革の進展に伴って、保護者等関係者から、森の幼稚園は「よい空気(frische Luft)を吸ったり、自然の知識を得たりする」ところなのか、「確実で、よい就学準備」を行っているのか、という質問が寄せられるようになった<sup>(44)</sup>。これに対し、森の幼稚園は、「よい研究成果が示されている多様な方法によって子どもたちの発達を支援している」と

し、さらにその成果として、様々な訪問先で「子どもは大人の話をよく聞いている」と回答している<sup>(45)</sup>。このように、就学準備としての大人の話をよく聞くことも重視されているのである。

もう一つは、当園が作成した「森のルール (Waldregeln)」と関係する。「森のルール」には、保育者が近くにいる時にのみ木に登ることができる、保育者に見える範囲で活動すること等が定められている<sup>(46)</sup>。これらは、自然環境の中で安全に活動するためのルールであり、また保育者が子どもの行動に気を配っているものと推察できよう。安全に活動するために、森の幼稚園の子どもにも、保育者の言葉に注意を払い、適切な行動をとることが求められるのである。以上「森のルール」が示しているように、森の幼稚園の活動空間との関連においても、保育者の話を聞くことは重要な意味を持っているといえよう。

これらをまとめれば、森の幼稚園においては、言語能力の促進は重要課題であるとの認識のもと、子ども自身が話すという面ばかりでなく、就学準備の一環としても、また森の幼稚園の活動空間との関連からも、保育者や大人の話を書くという面が重視され、この両面から言語能力の促進を図ろうとしているといえる。

## 5.2 多面的な就学能力の設定と実感を持った理解のための感覚の助長

幼小接続の観点からの分析結果について述べることにする。表1にも示したように、2004年版には、教育領域「自然」の中の一つの項目として、「就学能力」が位置づいていた。それが2008年版になると、独立した教育領域として「就学能力」が存在するようになる。それらの内容を一度確認しておくこととする。2004年版にみる就学能力は、「集中力」、「大きな運動の能力」、「繊細な運動の能力」である。大きな運動の能力は、全身を大きく動かすことと関係している一方で、繊細な運動の能力は、手先の器用さと関係しているとされる<sup>(47)</sup>。また2004年版では、消防署、パン屋、図書館等の施設に訪問することを通して、現実世界を体験することが就学能力育成のための必要事項として挙げられている<sup>(48)</sup>。2008年版では、2004年版を踏襲しながらも、「好奇心を持つこと」、「コミュニケーション能力を持つこと」、「様々な認識する能力を持つこと」、「学習への心構えを持つこと」等がみられるようになる<sup>(49)</sup>。また、2014年版以降には、教育領域に独立したかたちでの「就学能力」が見られなくなる。しかし、それら一つひとつを2014年版以降のカリキュラムから確認することができる。例えば、「好奇心を持つこと」は、

表 1. オイレンレスト森の幼稚園における2004年版, 2008年版, 2014年版のカリキュラム

	2004年版	2008年版	2014年版
総員数	5	9	24
根拠法令等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・NW 子どものための施設法<sup>(1)</sup></li> <li>・NW 州森の幼稚園協会<sup>(2)</sup></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども教育法<sup>(3)</sup></li> <li>・NW 州森の幼稚園協会</li> <li>・NW 州幼児教育要領</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童・青少年援助法<sup>(4)</sup></li> <li>・子ども教育法</li> <li>・NW 州森の幼稚園協会</li> <li>・NW 州幼児教育要領</li> </ul>
教育領域	1. 自然 1.1 想像力と創造力のための遊び場 1.2 言語発達への刺激 1.3 感覚の遊び場 1.4 自然経験空間 1.5 時間と静けさの場所 1.6 自然と出会う場所 1.7 社会学習のためのフォーラム 1.8 内側の強さの発達 1.9 個人の空間の提供 1.10 健全な周辺環境 1.11 就学能力 1.12 神の被造物	1. 自然 1.1 想像力と創造力のための遊び場 1.2 言語発達への刺激 1.3 感覚の遊び場 1.4 自然経験空間 1.5 時間と静けさの場所 1.6 自然と出会う場所 1.7 社会学習のためのフォーラム 1.8 内側の強さの発達 1.9 個人の空間の提供 1.10 健全な周辺環境 2. 就学能力 3. 神の被造物	1. 身体・運動・健康 2. 言葉・コミュニケーション・文字文化 3. 音楽 4. 社会・文化・多文化教育 5. 数学・自然科学・エコロジー 6. 造形
プロフィール	記載なし	記載なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会学習をすること</li> <li>・問うこと</li> <li>・運動すること</li> <li>・想像し創造すること</li> <li>・話すこと</li> <li>・健康的な栄養</li> <li>・自然・環境を経験すること</li> </ul>

(Naturgruppe „Eulennest“, *Konzept für Naturgruppe „Eulennest“*, 2004, Naturkindergarten Eulennest e.V., *Das Pädagogische Konzept*, 2008, Naturkindergarten Eulennest e. V., *Konzept des Naturkindergarten Eulennest e.V.*, 2014. もとに筆者作成。)

表内の注については以下参照：

- (1) Gesetz über Tageseinrichtungen für Kinder (1991-2008. 2008年8月以降は、(3)の法律へ置換。)
- (2) Landesverband der Wald- und Naturkindergärten NRW e.V.
- (3) Gesetz zur frühen Bildung und Förderung von Kindern - Viertes Gesetz zur Ausführung des Kinder- und Jugendhilfegesetzes - SGB VIII (Kinderbildungsgesetz, KiBiz)
- (4) Kinder- und Jugendhilfegesetz

「施設の理想像」という項目の中に位置づいている<sup>(50)</sup>。したがって、2014年版では特定の教育領域で就学能力の育成が目指されているというよりも、カリキュラム全体でその能力が育成されるようになったといえよう。なお、この「就学能力」は、州の幼児教育要領における「基礎コンピテンシー」とほぼ同義であるとされているように<sup>(51)</sup>、州の幼児教育要領の影響を受けたものと考えられよう。以上から、州の幼児教育要領に沿うようにして、就学能力の内実が認識や理解に関わる能力、学習意欲に関わる能力も含むようになるなど、多面化していることが確認できる。

その一方で、森の幼稚園の独自性が残る部分もある。森の幼稚園は、就学能力の育成とともに、感覚を鋭敏にすることも必要不可欠であると考えている。その意図は、森の幼稚園の「問題意識と教育の使命」から探ることができる。基礎学校に通っている「子どもたちは5という数字を書くことはできるが、それがどのくらいの量なのかかわからない。そこで私たちは、子どもたちの意識や、量、重さ、大きさ、音への感覚を高めるといふ使命」を持つこととする、とある<sup>(52)</sup>。つまり、先に挙げた多面的な能力の育成をねらった目標に留まるのではなく、就学後の学習において実感を伴った理解を促すために、子どもの感覚を鋭敏にすることも目指しているのである。こうした点は、州の幼児教育要領においては明示されていないため、森の幼稚園の取り組みの特質として指摘できるものである。

以上みてきたように、改革の影響により、就学能力は、認識や理解に関わる能力、学習意欲に関わる能力等も含む多面的な能力として考えられるようになった。また、就学後の学習において実感を伴った理解をするために、量や大きさなどの感覚を鋭敏にすることも目標として掲げられるようになった。こうした点はまさに幼小の接続をより円滑にし、その実現を具体的に図るものに他ならない。

### 5.3 知識と技能の獲得をねらった教育目標の導入

知的教育の観点からの分析結果について述べることにする。森の幼稚園は州の幼児教育要領に倣い、知的教育の導入を試みている。以下では、2014年版以降に登場する教育領域「数学・自然科学・エコロジー」の記述内容を見ていくこととする。なお、これに対応する州の教育領域は「自然科学・工学教育」、「エコロジー教育」、「数学教育」であり、これらを表2にまとめて示すこととする。

表1のように、2004年版、2008年版には、教育領域の中に学問領域が独立して設定されていない。またそこに掲げられている目標には、創設当初から大きな変化がなく、感覚を鍛えたり、運動能力を伸ばしたりすること等が中心である。本構成からは、教育フォーラムの提言、すなわち科学教育、技能教育、外国語、音楽・創造教育の充実等を図った知的教育への重点化の提言を明確に読み取ることができない。一方で2014年版は、「教育領域」として「自然科学教育」等が示されており、教育目標も、例えば、事物の量や重さを測ること、問いに対する答えを探ること、火や水などの素材の特性を経験すること等、NW州の幼児教育要領の記述と重なりが見られたため、知的教育の導入がみられると判断した。

表2. NW州の幼児教育要領とオイレンネスト森の幼稚園のカリキュラム

教育領域	目標等
三州幼児教育要領	自然科学・技能教育 <ul style="list-style-type: none"> <li>自然界の事象を観察し、それを正確に記述し、それらから問いを導く</li> <li>問いを立て、答えを探す</li> <li>観察、比較、評価を通して情報を集め、整理する</li> <li>(例えば火や水や空気を用いて) 実験し、その際、素材の特性や材料理解についてははじめの経験をする</li> <li>例えば、動物に接する際や自然の一部を育成する際に(例えば、木、庭、植物、学校の庭) 責任をとる</li> <li>遊び材料や構成材料を用いて自分の設計を案出する</li> </ul>
	エコロジー教育 <ul style="list-style-type: none"> <li>植物、動物、人間の生活共同体の相互依存性とつながりを認識し、それらを探索し、結果を導き出し、そして自身の方法を開発する</li> <li>天然資源や生物との慎重な付き合いを訓練する</li> <li>自己の行動が他の人間や環境に影響を与えることを認識する</li> <li>環境に対して責任を負い、自己決定する</li> <li>誕生から消滅までの自然の生活サイクルを知るようになる(種まき、発芽/誕生、成長、死、腐敗)</li> <li>施設外の環境を知り、変化を共に体験したり、形成したりする</li> </ul>
	数学教育 <ul style="list-style-type: none"> <li>単純な模様を発見したり描いたりし、規則正しいもの(模様、床タイル、小さなタイルなど)を続けたり、自分で作り出す</li> <li>様々な分類体系を知るようになり(カレンダー、時間、規則など)、その中にある構造を見つけ出す</li> <li>数の理解を発展させる(人数としての数、序数としての数)</li> <li>量や重さを測定すること、比べることといった活動を通じて大きさを比較したり、物体を特徴に従って分類したりする</li> <li>空間・位置・関連を経験、記述し、その際、「上」、「下」、「右」、「左」を使用する</li> <li>幾何学の基本形式とその特性を区別し、それらを環境の中で再認識する</li> </ul>
オイレンネスト森の幼稚園のカリキュラム	数学・自然科学・エコロジー <ul style="list-style-type: none"> <li>様々な材料(例:液体、重い材料、軽い材料)を用いて量、形態、大きさに取り組む:同じものは何か?全く違うものは何か?</li> <li>水、火、土、光、空気などの基本要素を経験する</li> <li>数と数量:多い、少ない、より大きい-より小さい、～よりもたくさん</li> <li>女児、男児ともに当該教育領域において公平な経験と知識を獲得する</li> <li>一人あるいは他の人とともに、探究の問いに対する答えを探す</li> <li>様々な道具を知り、使用する</li> <li>パターン化し、構造化し、順序化する</li> <li>素材の特性(形態、色、材質、一貫性)を知るようになる</li> <li>測定する(異なる容器、および異なる材料)</li> <li>計量する(秤と重量、パネばかり)</li> <li>様々な物質と水の中での動き(コルク、石、プラスチック、金属ボール)を知る</li> <li>様々な集合状態(蒸気、水、氷...)との実験をする</li> <li>時間を扱うような経験をする(時計、カレンダー、季節...)</li> <li>生命の基礎となる自然環境/自然を知るようになる(酸素供給者、基本的な食料品の供給者、生態系とのつながり、例えば、ハチがいなければリンゴはできない、水がなければ穀物は実らず、パンが作れない、菌がいなければ葉の分解はない...)</li> <li>環境/自然保護、動植物と慎重に付き合う、廃棄物処理、ゴミの削減、分別、堆肥化する</li> </ul>

(Ministerium für Familie, Kinder, Jugend, Kultur und Sport des Landes Nordrhein-Westfalen, Ministerium für Schule und Weiterbildung des Landes Nordrhein-Westfalen, *Mehr Chancen durch Bildung von Anfang an – Entwurf – Grundsätze zur Bildungsförderung für Kinder von 0 bis 10 Jahren in Kindertageseinrichtungen und Schulen im Primarbereich in Nordrhein-Westfalen*, 2010.ならびにNaturkindergarten Eulennest e. V., Konzept des Naturkindergarten Eulennest e.V., 2014. をもとに筆者作成。)

州の教育要領には見られないが、森の幼稚園のカリキュラムに明記されている内容として、「生活 (Leben) の基礎となる自然環境/自然を知るようになる」,

「酸素供給者，基本的な食料品の供給者，生態系とのつながり，例えば，ハチがいなければリンゴはできない，水がなければ穀物は実らず，パンが作れない，菌がいなければ葉の分解はない」ことを理解するという目標がある。これは，子どもが森の中で日頃目にし，観察可能な対象についての知識の獲得をねらっているものである。森の幼稚園には，「植物の名前を正確に言い当てることが重要なのではなく，植物を大切にし，それらの生息場所を残しておくことが重要だ」という自然保護の考え方が教育の基盤にある<sup>(53)</sup>。子どもたちが森の中で日頃目にし，観察可能な対象についての知識を獲得させることにより，「子どもたちの生活と自然との関連」や「自身は自然の一部」であることを感じさせ，これがひいては自然保護の意識の育成につながるというのである<sup>(54)</sup>。以上，森の幼稚園の教育の基盤にある自然保護の考えとの関連から，上記の目標が掲げられていると考えられる。

また，「様々な道具を知り，使用する」といった技能面に関する記述内容も見られる。森の幼稚園では，ノコギリやノミ，図鑑やルーペ等の道具を使う機会があり，そうした道具の使い方を獲得することが目標として設定されている。先にも少し触れたが，森の幼稚園は，既成のおもちゃを持ち込まない「おもちゃなし」の園として活動を展開している。したがって子どもたちは，自ら自然物を加工しておもちゃを作ることとなっている<sup>(55)</sup>。加工の際にノコギリ等の道具を用いることは必須であり，それらの正しい使い方の獲得が目指されているのである。また，改革の進展に伴い，保護者等関係者から，「子どもたちは枝やコケや葉を使って遊ぶだけか」，「他の材料も使うのか」という意見が出され，森の幼稚園は，布等の材料を用い，道具を適切に使うことも取り入れている，と回答している<sup>(56)</sup>。さらに，学習の最適条件としての疑問を追究したり，より深めたりするためにも道具の使用を積極的に行っている旨が記されている。このように，既成の「おもちゃなし」の森の幼稚園にとっては，子どもの思う通りのおもちゃを作成するため，さらに子どもの疑問を追究するために，道具の習得が必要であると考えられている。なお，州の教育要領には，演奏するための道具（楽器）や，メディア教育で用いる技能道具についての記載は見られるものの<sup>(57)</sup>，表1で示した教育領域においては技能面の獲得は必ずしも明記されていない。従ってこの点は森の幼稚園の特質であると考えられる。

以上，知的教育の観点から分析した結果，改革の流れを受けて，「教育領域」の中に独立した学問領域が設定され，知的教育の導入が確認された。また森の幼稚

園の教育の基盤にある自然保護の意識の育成をねらって子どもたちが森の幼稚園において観察可能な対象についての知識を獲得させること、そして自然物でおもちゃをつくるため、子どもが抱いた疑問を追究するためにも、技能面の習得が目指されていたことが確認された。

## 6. 結語

本稿では、ドイツにおける幼児教育制度改革の影響を受けた森の幼稚園の取り組みに関する教育的特質を、言語能力、幼小接続、知的教育に関する観点から解明した。結果、第一に、言語能力に関する観点からは、言語能力の促進は子どもの心身の発達に関わる重要課題であるとの認識を基礎として、話すことのみで徹するのではなく、就学準備や、自然空間の中での安全な活動を考慮し、保育者や大人の話聞くことにも力点を置き、言語能力の促進を図ろうとしていた。第二に、幼小接続の観点からは、認識や理解、学習意欲に関わる能力をも含む多面的な能力が教育活動全体を通して育成され、また就学後の学習において実感を伴った理解ができるよう、量や大きさの感覚を助長することも目標として設定され、幼小の接続をより円滑にしていた。第三に、知的教育の観点からは、自然保護の意識を育てるため、身近な対象について知るという知識面の獲得ばかりでなく、自然物を工作するため、子どもの疑問を追究するためにも、道具の使い方に関する技能面の獲得が同時にねらわれていた。これらの特質は、特定の森の幼稚園のカリキュラムに規定されているものではあるが、なおも昨今の幼児教育制度改革の流れを受けてきた森の幼稚園の一つの基本的な方向性を示すものではないだろうか。

本稿では、NW州における森の幼稚園のカリキュラムに限定して分析、検討したため、州間の森の幼稚園のカリキュラムの差異について、また実践レベルや結果レベルのカリキュラムである「実施したカリキュラム」、「達成したカリキュラム」についての吟味はしていない。また、オイレンネスト森の幼稚園のカリキュラム改訂のプロセスや評価にかかるさらなる資料の収集と、それを踏まえて森の幼稚園が州の教育要領にどのように対応していったのかについての踏み込んだ考察もしきれなかった。これらについては、別の機会に譲ることとする。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、ご指導を賜りました筑波大学名誉教授・常磐短期大学教授の大高泉先生に深く感謝申し上げます。

## 註

- (1) 原田信之、『確かな学力と豊かな学力 —各国教育改革の実態と学力モデル—』、ミネルヴァ書房、80–81頁、2007。
- (2) 小玉亮子、「ドイツ PISA ショックによる保育の学校化 —「境界線」を越える試み」、泉千勢、一見真理子、汐見稔幸編著、『世界の幼児教育・保育改革と学力』、明石書店、76頁、2008。
- (3) KMK-Pressenmitteilung, <http://www.kmk.org/presse-und-aktuelles/pm2001/296plenarsitzung.html>, (最終アクセス2017.8.28)。
- (4) 例えば、Nobert Huppertz(Hrsg.), *Kindergärten für Kinder: Das Bild des Kindes, Waldkindergarten, Lebensbezogener Kindergarten, Montessori-Kindergarten, Offener Kindergarten*, PAIS, 2003 や、Tassilo Knauf, Gislinde Düx, u.a., *Handbuch Pädagogische Ansätze: Praxisorientierte Konzeptions- und Qualitätsentwicklung in Kindertageseinrichtungen*, Cornelsen, 2013 や、Katharina Lorber, *Elementarpädagogische Handlungskonzepte*, Nobert Neuß(Hrsg.), *Grundwissen Elementarpädagogik: Ein Lehr- und Arbeitsbuch*, S.105–116, Cornelsen, 2016 や、Sigrid Ebert, Tanja Pütz, u.a., *Pädagogische Handlungskonzepte von Fröbel bis heute, kindergarten heute - wissen kompakt/ Themenheft zu fachwissenschaftlichen Inhalten*, Verlag Herder, 2016 など。
- (5) 百合草禎二、「ドイツの『森の幼稚園』—その20年後—」、『常葉大学保育学部紀要』、第1巻、39–52頁、2014。
- (6) 今村光章、『森のようちえん 自然の中で子育てを』、解放出版、2011。
- (7) Miklitz Ingrid, *Der Waldkindergarten: Dimensionen eines pädagogischen Ansatzes*. Cornelsen, S.28–29, 2011.
- (8) 東方真理子、「森の幼稚園における自然とふれあうことの意味」、東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻提出修士論文、<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/52342/1/K-03420.pdf>, (最終アクセス2017.8.28)。
- (9) 木戸啓絵、「現代の幼児教育から見たドイツの森の幼稚園」、『教育人間科学部紀要』、第1巻、2010。
- (10) 国立教育研究所、「小学校の算数教育・理科教育の国際比較—第3回国際数学・理科教育調査最終報告書—」、東洋館出版社、24–25頁、1998。
- (11) 江島正子、「幼児教育の制度と現実」、天野正治・結城忠・別府昭郎『ドイツの教育』、東信堂、83–84頁、1998。
- (12) マックスプランク研究所研究者グループ、『ドイツの教育のすべて』、天野正治、木戸裕、長島啓記監訳、東信堂、169頁、2006。



- (13) 江島正子, 「ドイツの幼児教育」, 『教育と医学』, 第51巻, 第2号, 49-50頁, 1998。
- (14) 上野千鶴子, 田中美由紀, 前みち子, 『ドイツの見えない壁 一女が問い直す統一』, 岩波新書, 138頁, 1993。
- (15) 天野正治, 木戸裕, 長島啓記, 『ドイツの教育のすべて』, 東信堂, 168頁, 2006。
- (16) 齋藤純子, 「ドイツの保育制度 — 拡充の歩みと展望 —」, 『レファレンス』, 2頁, 2011。
- (17) 坂野慎二, 「学力低下への危機! 基礎学力向上の一連の行動アクション」, 『CS 研究レポート』, 第48巻, 啓林館, 32頁, 2003。
- (18) 原田信之, 前掲書, 80-81頁, 2007。
- (19) 同上。
- (20) KMK-Pressenmitteilung, 2001, <http://www.kmk.org/presse-und-aktuelles/pm2001/296plenarysitzung.html>, (最終アクセス2014.10.14)。
- (21) 坂野慎二, 「ドイツにおける PISA ショックと教育政策」, 『ドイツ研究』, 第37号, 35頁, 2004。
- (22) 小玉亮子, 前掲書, 74頁, 2008。
- (23) Ministerium für Schule, Jugend und Kinder des Landes Nordrhein-Westfalen, *Bildungsvereinbarung NRW: Fundament stärken und erfolgreich starte*, S.6, 2003。
- (24) Ministerium für Familie, Kinder, Jugend, Kultur und Sport des Landes Nordrhein-Westfalen, Ministerium für Schule und Weiterbildung des Landes Nordrhein-Westfalen, *Mehr Chancen durch Bildung von Anfang an – Entwurf –, Grundsätze zur Bildungsförderung für Kinder von 0 bis 10 Jahren in Kindertageseinrichtungen und Schulen im Primarbereich in Nordrhein-Westfalen*, 2010。
- (25) Ministerium für Familie, Kinder, Jugend, Kultur und Sport des Landes Nordrhein-Westfalen, *Bildungsgrundsätze für Kinder von 0 bis 10 Jahren in Kindertagesbetreuung und Schulen im Primarbereich in Nordrhein-Westfalen*, Herder, 2016。
- (26) Kirsten Bickel, *Der Waldkindergarten: Konzept · Pädagogische Anliegen · Begleitumstände Praxisbeispiel Wyk auf Föhr*, NordMedia, S.14, 2001。
- (27) Kirsten Bickel, a. a. O., S.14, 2001。
- (28) Nobert Huppertz, *Handbuch Waldkindergarten: Konzeption, Methodik, Erfahrungen*, PAIS, S.138, 2004。
- (29) Ebenda., S.55-67。
- (30) 「社会性を養う教育」は, 例えば自分の意思を伝えること, 自分と他人の感情を認識すること, 受け入れることを学習することである (Bickel, 2001, S.30)。
- (31) 「運動能力の促進」は, 例えば森の中の様々な場所で自然にバランス感覚と筋肉を訓練することである (Bickel, 2001, S.33)。
- (32) Nobert Huppertz, a. a. O., S.77-79, 2004。
- (33) Ebenda., S.151-152。
- (34) Naturkindergarten Eulennest e.V., *Zeit – Raum fürs Leben: Konzept des Naturkindergarten Eulennest e. V.*, S.13-14, 2016。

- (35) Ebenda.
- (36) Naturgruppe „Eulennest“, *Konzept für die Naturgruppe „Eulennest“*, S.2, 2004.
- (37) Naturkindergarten Eulennest e.V., *Das Pädagogische Konzept*, S.3, 2008.
- (38) Naturgruppe „Eulennest“, a. a. O., S.3, 2004.
- (39) Naturkindergarten Eulennest e.V., a. a. O., S.4, 2008.
- (40) Naturkindergarten Eulennest e.V., a. a. O., S.10, 2014.
- (41) Naturkindergarten Eulennest e.V., a. a. O., S.5, 2016.
- (42) Naturkindergarten Eulennest e.V., a. a. O., S.10, 2014.
- (43) Ministerium für Familie, Kinder, Jugend, Kultur und Sport des Landes Nordrhein-Westfalen, Ministerium für Schule und Weiterbildung des Landes Nordrhein-Westfalen, a. a. O., S.44, 2010  
および Ministerium für Familie, Kinder, Jugend, Kultur und Sport des Landes Nordrhein-Westfalen, a. a. O., S.95, 2016.
- (44) Naturkindergarten Eulennest e.V., *Informationen über die Natur-/ Waldkindergarten Arbeit*, S.15–16, 2015.
- (45) Ebenda.
- (46) Naturkindergarten Eulennest e.V., a. a. O., S.7–8, 2014.
- (47) Naturgruppe „Eulennest“, a. a. O., S.4–5, 2004.
- (48) Ebenda., S.5.
- (49) Naturkindergarten Eulennest e.V., a. a. O., S.5, 2008.
- (50) Naturkindergarten Eulennest e.V., a. a. O., S.14, 2016.
- (51) Naturkindergarten Eulennest e.V., a. a. O., S.5, 2008.
- (52) Naturkindergarten Eulennest e.V., a. a. O., S.9, 2014.
- (53) Naturgruppe „Eulennest“, a. a. O., S.3, 2004.
- (54) Naturkindergarten Eulennest e.V., a. a. O., S.24, 2014.
- (55) Naturkindergarten Eulennest e.V., a. a. O., S.13, 2016.
- (56) Naturkindergarten Eulennest e.V., a. a. O., S.15, 2015.
- (57) Ministerium für Familie, Kinder, Jugend, Kultur und Sport des Landes Nordrhein-Westfalen, Ministerium für Schule und Weiterbildung des Landes Nordrhein-Westfalen, a. a. O., S.70, 2010.